しあわせはちゃいろ

綾乃

1

胸を張って言うことでも、項垂れて言うことでもないけれど、わたし、一村譲葉はコーラ中毒である。
毎日、五百ミリリットルのペットボトル一本、ダイエットタイプのコーラを飲んでいる。それ以上は飲まないよう、それだけ、と決めている。
時々スーパーで段ボール入りのコーラを買ってくるのだけれど、近所ではやはり恥ずかしくーーー否、どこでも割りと恥ずかしいのだけれどーーー車で十分のところで買う。
これを知っているのは、母と、姉の邑子と、友人知衛、付き合って半年ちょっとの恋人の昴だけである。
スバルはわたしの部屋に来る度、
「また増えてる……」
と、呟く。
実際は、買った分飲んでいるわけだから、「減っている」のだけれど。……もしかしたら、空きペットボトルのことを言っているのかもしれないけれど。
そんなわたしもスーパーに行ったり、コーラを飲んだりしているだけの生活というわけではなく、学校に行っている。美容系の学校なので、スバルの髪を整えるのはわたしの仕事で、そのお礼、としてコーラの次にはまっているアサイーボウルを奢ってもらう、それが習慣になっている。
そんなわたしとトモエが、美味しいと密かに流行っている蕎麦屋で二人でざる蕎麦をすすっている時、始まった話である。
……これまで、食べ物の話ばかりしているわたしだけれど、太ってなどいない、断じて。
「トモエ、髪切った？」
「切ってない。切るならユズに切ってもらうし」
「わたし修行中だし、美容院行った方がいいと思うんだけどね……切ってないのか。アレンジのせいかな？ 短く見えるの。これくらい察せないとダメだね」
トモエはロングの明るい髪を、今日は前髪を編み込み、後ろは高めのポニーテールにまとめていた。
「スバルくんの髪は切ってるんでしょ？」
「スバルくんは何も文句も注文もしないからやりやすい。そのうち坊主にしてやろうと思う」
「坊主にしたら当分カットできないし、アサイー奢ってもらえないんじゃないの」
「……なるほど、そうだね」
坊主にしたスバルを思い浮かべようとしても、あまりに似合わないだろうとしか想像できなかった。
「スバルくんもうすぐ誕生日なんだよね」
「先週聞いたよ、それ」
「あ、そうだっけ。で、プレゼント、何がいいかな？」
「自分で考えなよ、って、先週言ったよ」

「やっぱ、先月壊れたお財布かな。それとも、スバルくんの趣味の紅茶？ うーん、お財布ってスバルくん高いの好きだしな、と言って紅茶も安いの飲ませるとすぐ気づくもんなぁ」
どうでも良さげにーーー実際どうでもいいのだろうが、否、間違いなくどうでもいいと思っているはずだがーーートモエは、何度も頷く。
「紅茶なら奮発してもお財布に痛くないよね」
「コーラでもあげたら」
「コーラはわたしの」
「……ほんとコーラにかけては人格変わるよね」
「一度、姉にストックのコーラ飲まれて泣いたことがある」
何その話、とトモエが何故か食いつく。

2

　譲葉十七歳、コーラ中毒数年目の話。
わたしはその頃、コーラと少年漫画のコミックスのために、アルバイトをしていた。
　少ないお給料で週に一度、七本コーラを買い、毎朝一本ずつ冷蔵庫に入れていた。
　ある日学校から帰り、アルバイトの前に小さなグラス一杯、百ミリリットルだけコーラを飲もうと、冷蔵庫を開けた。
　あれ？ ここに朝入れたのに……はっ、お母さんが移動させたのか、と、野菜室まで開けてみた。
　なかった。
　わたしの大事なコーラ。
　頭に「？」を浮かべていると、姉が台所へ入ってきて、
「あぁユズ、コーラ貰ったわよ」
「は？」
　それまでより沢山の「？」が浮かんだ。「？？」である。
「え、コーラ……」
「いっぱいあるんだから一本くらいいいでしょ」
　譲葉、「？？？」である。
「え……飲んだの？」
「飲んだ」
「一本？」
「一本」
「五百ミリリットル？」
「厳密に言えば」
　それがどうかした？ 逆に「？？？」といった顔をしている姉に、わたしは、キレた。
「何で飲むのおぉ！」
　わたしは、泣いた。
「最後の一本だったんだよ！ 明日買うまであれしかなかったんだよ！ バイトに行くまでに百ミリリットル、帰ってきてから百ミリリットル、食事のあとに百ミリリットル、お風呂から上がって二百ミリリットル飲もうと思っていたのに！」
「一日飲まないくらい……死ぬ訳じゃあるまいし……」
　姉は戸惑っていた。今思い出しても腹が立つと同時に、自分が姉の立場だったら同じように戸惑うであろうと考えられるが。
「死ぬの！ 中毒だから！」

トモエは肩を震わせて笑った。
「そんなに……そこまで好きだったの、コーラ」
「そうだよ」
「しかも、ユズ、今顔真っ赤。未だに怒ってるの」
当たり前だ。だって、未だに謝ってもらっていない。……さすがに、今さら「あの件謝ってよ」と言うほどわたしは恥知らずでもないが。
否、恥知らずである。今の話は途中から興奮してしまい、蕎麦屋中に聞こえていたはずだ。客と店員、皆が、わたしがコーラ中毒でキレやすい若者だということを知った。知り合いがいなくて、良かった。
「す」
「え？」
「……ばるくんが、紅茶中毒じゃなくて、良かったね……」
「……そうだね」
まだ腹を抱えて笑っている友人の頭を睨み、蕎麦湯を注いだ。
こんな話をしている場合じゃない。
デパートに、スバルの誕生日プレゼントを買いにいこう。

さすがに、今のバイト代はコーラとコミックスに使い果たしてはいなかった。
時給も高校生の時より高いし、遅くまで働けるから、給料は増えた。当然、残高に諭吉がないなどということはないのである。
「紅茶、高いな……」
デパートの専門店で、なんちゃら御用達やらなんちゃら賞受賞やらの紅茶を眺める。一人言を言ってしまったことに気づき、鼻をすすって誤魔化す。
「ご試飲いかがですか？」
わたしの低俗な一人言を聞き付けたのか聞こえなかったのかわからないが、店員が紙コップを手にわたしの顔を覗き込んだ。
「あ、はい」
紙コップを受け取り、口へ近づけると、嗅いだことのないくらい良い香りがした。
「わ、良い匂い」
「ありがとうございます」
「……アールグレイ、ですか？」
「はい」
さすがにアールグレイくらいは私にも解る。ちなみにコーヒーは、とても甘くしたものしか飲まないし、解らない。
「……美味しい 」

スバルは、これくらい高価な紅茶に慣れているのだろうか。たしか、わたしには見会わない、そして彼の風貌や口調には似合わない、上流家庭(このふざけた言葉を使うと彼は怒る)の出だったはずだ。
「アールグレイ……」
棚のアールグレイの缶を見ると、二千円の値だった。
紅茶にしては高いが、これなら、一緒にマフラーか手袋を付ければお財布一つより見映えがするな、と、即購入を決定した。

アールグレイと、スバルの黒髪に似合う紺色のマフラー。綺麗にラッピングして、棚に隠した。
誕生日当日は、わたしが下手な料理をする。ケーキは予約済み。
ケーキはやや高かったが、(わたし、「高い」ばかり言っているな……)一年に一度だし、と財布を見つめるわたしの目は死んでいるだろう。いやいや、恋人の誕生日に向けて死んだ目をしてはいけない。
完璧な段取りのつもりだったが、忘れていた。わたしが、バカだということを。

「ユズリ、来週、映画見に行かないか？」
スバルから電話があった。
「映画？ 行く」
「ホラーだけど」
「えっ、やめようよ？」
スバルはくつくつと笑う。冗談だ、バカユズリ。
「ユズリが好きそうな恋愛もの。……っていうか、この間読んでた、少女漫画の実写。これなら実写化しても許す！ て言ってただろ」
タイトルを言われ、あぁ、と、頷く。
「ふふ」
「ん？ 何」
「嬉しい、覚えててくれて。スバルくん、少女漫画とか恋愛映画好きじゃないのに」
「あぁ、でも、ーーーって漫画は読んだ」
「えっ！？ 本当に！？ じゃぁ、じゃぁ、三巻のカツマル先輩のツンデレ名シーン」
「そこまで読み込んでねぇよ……」
興奮したわたしの言葉を遮る。漫画喫茶で読んだだけだそうだ。でも、十分嬉しい。
「でもでも、ランコ先輩の台詞は覚えてるでしょ？ ミツキー、ゴミは」
「覚えてねぇって」
再び遮られた。ミツキー、ゴミはカツマルのアフロの中に捨てなさい。
「じゃ、行くな？」
「はい、行きます！」
「よし、じゃ、火曜の二時に横浜駅」

「えーーー」
火曜は、と言いかけて、やめたところで、ぷつりと通話が切れた。
横暴だよ、スバルくん。
その日、うちでご飯作るねって言った、スバルくんの誕生日、当日じゃない。

二十四日、午後一時半。
がたん、ごとん。
がたん、ごとん。
急行に揺られて、駅へ向かう。
いつもより人が多い。あぁ、冬休みに入ったからか、若い子(わたしも若い！)が多いな。
がたん、ごとん。
がたん、ごとん。
がたたん！
「えっ、なに？」
電車が急ブレーキをかけた。立っていたわたしはつんのめって、つり革がきしむ。
ーーー「やだ……」「人身？」「止まったよ……？」「ぶつかったの？」「遅れちゃう」ーーー乗客がざわめく。
すぐに車内にアナウンスが入る。まだ若そうな男性の声で、線路内に犬が入り込んだことを告げた。
アナウンスの一言目が流れてから静まっていた車内が、再びざわめきだす。
ーーー「犬？」「ははは っ」「犬なんか轢いちゃえばいいのに」ーーーえっ？ーーー「せっかくのーーー」「遅れ、二、三分だよね？」ーーー。
乗客の一人の言葉に引きつつ、わたしはケータイを見て、時間を確認した。その行動が、自分も犬の命を軽視したようで、それを恥じ、ポケットにしまった。

駅には、十五分前に着いた。普段から、十五分前に待ち合わせ場所に着くよう計算して行動しているし、今日は相手がスバルなので、余計に早く出てきたから。
スバルはやっぱり、既に改札の外の柱にもたれて待っていた。
お待たせ、スバルくんーーー声をかけようとして、はっとする。
スバルくん、マフラーしてる。
白いマフラー。
それは、見たことのないマフラー、つまり、新しく買ったか貰ったーーー誕生日に、貰った、のではないかと思われるマフラーだった。
「……スバルくん」
「あぁ、早いな、ユズリ」
「お、……お待たせ、スバルくん」
「いや、待ってねぇよ。お前いつも早いな」
「マフラー」
「あ？」
首もとの白を指差し、

「新しいの？ 似合うね！」
「あぁ、これか。……貰った」
「そ、……う、なんだ」
貰ったって、誰に？ ……お母さんとか？ 兄弟とか？ ……女の子？
いや、硬派なスバルくんが、私以外とそんな関係になったり、そうでない子からプレゼントを貰ったりはしないはずだ。
「それより、映画館。行くぞ」
あれ、今、誤魔化した？ 少しだけ猜疑心がわくのを抑えながら、スバルについて行った。

5

「ポップコーン、食う？」
「うん！」
映画のときにポップコーンというのはね。
前月、ツイッターで回ってきたうんちくを垂れる。
「ポップコーンが飲んだ水分を吸うから、……」
そこまで言って、言葉を詰まらせた。
「と、トイレ……に……」
「……もういい、分かった」
恥ずかしくて、このあと「トイレに行きたい」とか言えない、「トイレ行くか」って聞かれたくない、と顔を俯ける。きっと、顔真っ赤。
「とにかく、買ってくるから待ってろ」
「うん……ごめんね、ありがとう……」
トモエには最後まではっきり言えたうんちくが、スバル相手だと妙に恥ずかしい。女友達になら、もっと下ネタだって言えるのに。
……付き合ったのが、スバルが初めてだから、というのもあるんだろう。
コーラのために働いてばかりだったから、恋愛に免疫がない。
ああ、コーラ中毒。これさえなければ。
「おい、ユズリ」
「あっ、はい！」
顔を上げると、スバルがトレイを持って立っていた。見上げたスバルは、きりっとした顔がいつもと同じため息の出る美しさで、つい見とれた。
「待たせたな、レジ混んでて」
「うう、ん……？」
なぜトレイを持っているのか。
一瞬「？」を浮かべ、すぐ気付いた。
ポップコーンが一つに、ドリンクが二つ。
「……」
映画にポップコーンというのはね。
いや、せっかくスバルが買ってきてくれたのだ。笑顔を浮かべなくては。
「ありがとう、スバルくん」
「別に」
「お金……」
「毎回言ってるだろ」
恥ずかしいから払わせねぇよ、と。
わたしの彼氏はとっても格好良い。

そのまま席へ行き、スバルからドリンクを受けとる。
「中身、なに？」
「コーラ」
う、とついそれを見つめた。
コーラ。
……ダイエットタイプだろうか。
「ダイエットじゃないけど、ムリか？」
顔に出てしまったのだろうか。また恥ずかしく思いながら、首を横に振る。
「たまの普通コーラは……ご褒美です！」
「何の」
ストローに口をつけ、すする。
うん、おいしい。
そう言うと、スバルは顔を緩めた。

映画は、原作の漫画に忠実な作りで、とても良かった。わたしは、映画の感想は、
「すっごく、面白かった！」
しか言えない。
「告白シーン、サムかったな」
「寒かった？ ブランケット、借りたら良かったかな」
「……そうだな」
少し二人で無言で歩き、あ、間違えたな、と意味に気付く。スバルは隣で震えだした。これは寒いのではない、笑っている。
「……笑わないでよ」
「笑う、だろ……」
「もー」
映画館を出て、ビル風に背中を丸める。少し前を歩くスバルは、ぴんと伸びた背筋が綺麗で、わたしも見習わないと、と姿勢を正した。
「ユズリ」
彼が首だけ振り返り、左手を差し出す。
「え？」
「隣を歩け。どこかに消えそうだ、お前」
ーーーただでさえ、人混みなんだから。
その手を握ると、大きな手は意外に温かくて、ほっとした。
「約束通り、うちでご飯作るから！」
「あぁ」
「あっ、デパートでケーキ受け取らなきゃ」
「分かった」

デパートの地下で、予約していたものを受けとる。
こちらでお間違えないですね。
見せられたケーキを見て、言葉を失った。
ピンクのフランボワーズのムースの上には、白いクリーム。
それに立て掛けるように刺された、トナカイとサンタクロース。
ーーー十二月二十四日。
今日は、クリスマスイブだった。

「誕生日ケーキ？ そんな恥ずかしいもんいらねぇよ」
と、スバルが言わなかったのは、そのせいなのだった。クリスマスイブならば、ユズリもケーキを食べたいだろう。そう考えたのだ。
「スバルくん……」
「何？」
「なんでもない……」
スバルの誕生日がクリスマスイブだなんて。クリスマスイブがスバルの誕生日だなんて。スバルの誕生日のことばかり考えてて、クリスマスに気がつかなかったなんて。
「お邪魔します」
わたしの部屋に入る度、彼は礼儀正しく言う。やっぱり、育ちの良さは消えない。背筋が伸びているのも、そう。
「どうぞ、座って」
下ごしらえをしていた食材を冷蔵庫から出し、鍋やオーブンに入れる。簡単なものしか作れなかったけれど、種類は多い。
「もうすぐ出来るから！」
お皿を出しながら声をかけて振り返ると、すぐのところにスバルが立っていた。
「うわ、びっくりした」
「手伝うことあるか」
「大丈夫、テレビでも……あっ、漫画でも読んでて！」
「……少年漫画読んでるな」
少女漫画でもいいのに、と思いながら頷く。
しんとした部屋に、ページをめくる音、そしてオーブンを閉める音がして、料理が完成する。
「スバルくん、出来たよ、運ぶのだけ手伝ってくれる？」
「ああ」
スバルにチキンとサラダを運んで貰い、オードブルをトレイに乗せる。ケーキは冷蔵庫、それから、スバルのためのシャンパンと、わたしのコーラ。
「またコーラか、ユズリ」
「……今日は特別、でしょ」
「クリスマスだもんな」
あ、イブか、と訂正する。違うよ、あなたの誕生日だからですよ。
「とりあえず……」
「……とりあえず？」
「乾杯」
「乾杯！」
笑いながら、シャンパングラスに入れた透明とカラメル色のドリンクを掲げる。

「あ、美味い。サラダのドレッシング、手作りか」
「えっ？ ……分かるの？」
「俺も料理するから」
女子力の高い彼氏に感動していると、チキンも、誉めてもらえた。
ーーーところで、スバルくん。
あなた、自分の誕生日を、私が知らないと思っていますね？
プレゼントをしまった棚を横目で見る。
ーーーところで、わたし。
今日、クリスマスのプレゼントを忘れていますよ。
つい心で項垂れていると、スバルが、目が死んでるけど、と指摘した。
いけない。彼氏の誕生日に、クリスマスイブに目を死なせてはいけない。
「……ねっ、ケーキ！ ケーキ食べよう」
「ああ」
お皿を簡単に片付けて、テーブルにスペースを作る。冷蔵庫を明けて、そっとケーキを出してお皿に乗せる。普段は使わない大きなお皿だ。それと、取り分けるための小さめのお皿も二枚、それからフォーク。
ケーキの上には、サンタクロースやトナカイの他に、「Happy Birthday スバル」と書いたチョコレートのプレートも乗っていた。チョコレートが有名なお店のケーキだからきっと、それも美味しい。
「スバルくん」
「ああ」
トレイをスバルの目の前のテーブルに置く。ハッピーバースデーの文字が、彼に見えるように。
「お誕生日、おめでとう！」
彼はケーキを見て、あんぐりと口を開けていた。彼のこんな表情は初めて見る。
今日は色々と失敗したけれど、これは成功だったようだ。
「スバルくん、誕生日だよね」
「あ、……ああ」
「……クリスマスなの、忘れてたから、プレゼントはないんだ、ごめんね」
「は？ 忘れてたのかよ 」
「うん……でも、誕生日プレゼントは！ あるよ」
棚に手を突っ込みながら、あ、マフラー被ったんだった、と一瞬固まるが、すぐ持ち直す。色も違うし、紅茶もあるし、と。
「これ！ お誕生日おめでとう」
もう一度言い、差し出す。スバルは受け取って私の顔を見た。
「……ありがとう、な」
「ううん」
「俺からもあるから、あとで。開けてみる」

リボンをほどき、中からまず、大きな方、マフラーを取り出す。
ぱっと表情が明るくなった。それを見て安堵する。
「良い色だな」
「うん」
「手触りが良い」
「だよね」
「俺の好きなデザインだ」
「そうでしょ」
わたしが調子に乗りかけたところで、次に紅茶を見ると、「おお」と呟いた。
「高かったろ」
「あ、いや、まあ」
「あ、悪い、値段の話なんか」
こういうところが似た者同士なのかもしれない。わたしも値段を気にして買ったから。
「……ありがとう、な」
さっきと同じ言葉を繰り返す。少し照れているようだった。ーーーかわいい、と、頬が緩むのを、目を伏せていたスバルには見られずに済んだ。
「俺のマフラー、やる」
「えっ、でも、貰ったんじゃ」
「……編んだ」
「え？」
「俺が編んだ」
ぽかんとしていると、スバルは顔を背けて、鞄に手を突っ込んだ。
「これ、俺からな」
スバルは小さな長方形の箱を取り出した。黒い本体に、白いリボンがかかっている。
あ、と思った。
黒髪のスバルに、白いマフラーみたい。
そんな馬鹿馬鹿しいことを考えたのは一瞬で、次の瞬間には、中身のことを考えた。
クリスマスイブ。恋人。細長い箱。
これは、多分、ネックレス！
「ありがとう、大事にする！」
「いや、大事にはしなくていい」
苦笑いする彼から受け取り、リボンをするりとほどく。
今度は、あれ、と思った。
この香り、なんだっけ？
蓋を上げると、輝く、
ーーー輝く、銀箔。
の、乗った、チョコレート。

「チョコレート……」
「嫌いか？」
スバルが少し心配そうにきく。
「ううん、……ううん、好き」
「良かった。そこのチョコレート、たぶん、日本で売ってるチョコの中で一番美味い。とりあえずとにかく、俺が今まで食べた中では、一番。あ、ベルギーに行ったとき食べたものとは比べられねぇけど、それはまた、今度一緒に行って食おう、でも……」
一息に言って、固まるスバル。……固まる前、彼は、見たこともない生き生きとした顔をしていた。声も、肩も、弾むようだった。
「……悪い」
「ううん」
「……好きなんだ」
「チョコレートが」
「ああ」
そうか。
さっき、ケーキに目が釘付けになっていたのは、チョコレートで有名な店の、チョコプレートが食べたかったからなのだ。
……いつもカフェで、カフェモカ飲んでたもんな。
「ふふ」
「……」
「ありがとう」
「……いや」
「大事に食べる」
「ああ」
チョコレートの箱を閉じてテーブルに置き、まだ照れたままのスバルに、ケーキを取り分ける。
もちろん、チョコレートのプレートはケーキの上に置いてあげた。
「……なんか、チョコなんかでごめんな」
「どうして？ スバルくんが好きなチョコレートでしょ」
「まあな」
「今度、一緒にベルギーに行ってくれるんでしょ」
「嫌じゃなければ」
「バレンタインとかに行けたらいいなあ。あ、そしたら混んでる……って、バレンタインにチョコレート贈るのは日本だけなんだっけ。でもそれまでにバイト代貯まらないなあ」
「……」
スバルは目を伏せて黙り混んでしまった。
「あっ、ごめんね、ケーキ食べよう。チョコレート食べたかったよね」
「な、違ぇよ！」

照れるスバルをからかう。こんなことは滅多にない。でも、誕生日だから、これ以上はしないでおこうと思う。
「チョコレートケーキじゃなくてごめんね。いただきます」
最後に一言だけ言って、ケーキを口に入れる。
「美味しい」
「……いただきます」
照れた表情は、チョコレートを口に入れた瞬間、ふわっと、チョコが溶けたようにほどけた。
「美味い」
「うん。……でも甘いね。さっぱりしたもの飲みたい」
紅茶とか、コーヒーとか、と言おうとすると、
「コーラとかな」
と、ケーキを見せる前までのようなクールな表情で呟いた。
「……そう、コーラとか」
コーラはわたしの。
姉にも、一口もあげない。
コーラは、スバルにもあげない。
もし飲まれたら、付き合って初めての、痴話喧嘩をしてみるのも、良いかもしれない。

しあわせはちゃいろ

http://p.booklog.jp/book/93804

著者：綾乃
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/ayano0614/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/93804

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/93804

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ